■水辺のまち再生プロジェクトヒアリング記録
日時：2020年12月22日火曜日　10時30分～11時30分
ヒアリング対象：水辺のまち再生プロジェクト　笹尾和宏氏、末村巧氏）
参加者：水都大阪コンソーシアム　近藤・岡田
　　一般社団法人水辺ラボ　杉本・依藤

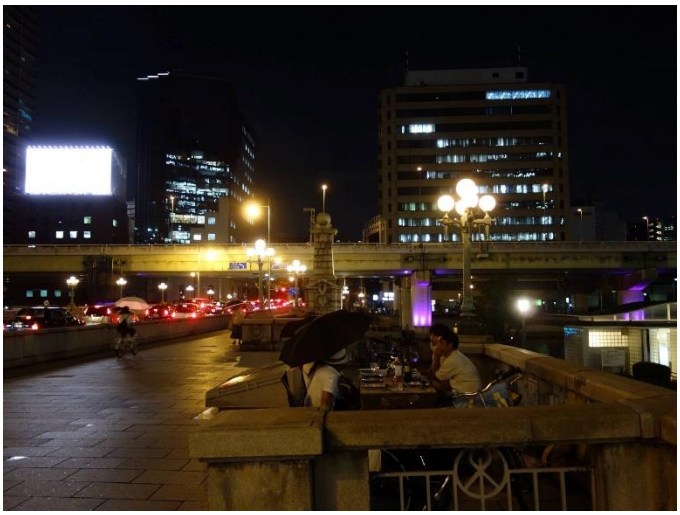
大阪の都心部の水辺をより身近に感じられる都市生活を目指し、様々なプロジェクトを実践されている水辺のまち再生プロジェクトの笹尾氏、末村氏にお話を伺いました。

水辺のまち再生プロジェクトは、大阪の都心部の水辺空間の「遊ぶ、住む、働く」それぞれの場面で、水辺をより身近に感じられる都市生活を実現するため、自分たちが楽しいと思えるアイデアを提案し、プロジェクトとして実践している。「水辺」は目的ではなく手段であり、水辺を使い、水辺で時間を過ごすことで、生活をより素敵にすることを目的としています。

市民の立場で、水辺空間を使い楽しむ活動から、使い手を育てる学びまで。

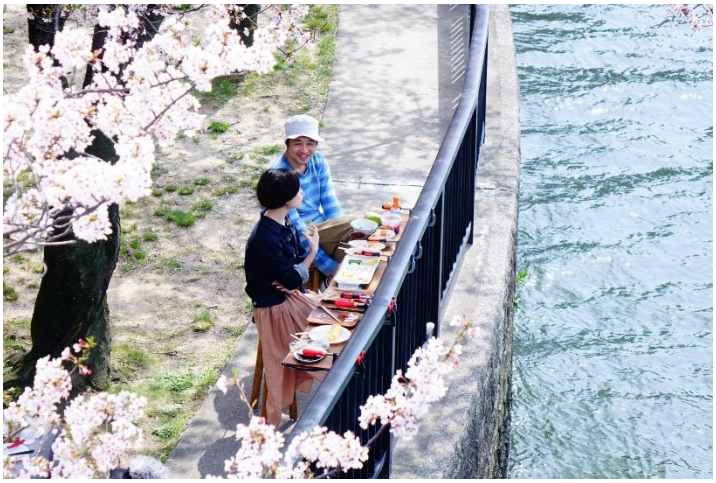
● 東横堀川では、公園やβ本町橋、護岸改修など賑わいづくりに向けた新たな動きが出てきています。立地や規模、地域との関わりの経緯を考えても、これまでの水都大阪で行われてきた企業活動中心の賑わいづくりよりも、水辺のまち再生プロジェクトが取り組んでこられた様な、よりパーソナルな活動が活かされる場になっていくと考えています。これまでの水辺空間を活かした活動を教えていただけますか。

（笹尾）
水辺のまち再生プロジェクトは公共的な団体ではなく一市民として活動してきていることもあり、占用許可や使用許可が不要な範囲での活動をメインとしています。中之島公園の地先でランチをする水辺ランチ等の活動から始まり、水都大阪 2009 以降は手漕ぎボートを川に浮かべたり、ピクニック以外の水辺での食の楽しみ方として、水辺ダイナーを行ったりしています。水辺ダイナーは、交通の妨げにならない川辺の気持ちいい場所を探し、テーブルセットでディナーを楽しむ活動で、占用許可も使用許可も不要です。



【橋の物見台部分を活かした水辺ディナーの様子（出典：水辺のまち再生プロジェクト）】

最近だと、物を固定するための工具「クランプ」を利用して、まちの構造物を頼りに居場所をつくる「クランピング」を実践しています。2019年度には北は気仙沼、南は石垣島まで全国19箇所とネットワークしてフィールドリサーチしました。自分のまちで１週間クランピングしてその様子を写真で共有するもので、自分の住んでいるまちの可能性を見つける活動となりました。



【手すりを活用したクランピングの様子（出典：水辺のまち再生プロジェクト）】

● 法令などにも配慮しながら、どう水辺空間を居場所として自分たち市民が楽しんで使えるのかを探求されていたり、活動の中で得たノウハウを他の方に伝える活動もあるのですよね。

（笹尾）

クルーズの企画をお手伝いしたり、公園や水辺を使ったイベントの相談やお手伝いをしています。一般の方が公園や河川でのイベントをやりたいと思っても、窓口や必要な許可など分かりづらい部分が多いので、協議や調整そのものは実施主体の方にお任せするのですが、そこまでのつなぎや翻訳のお手伝いをしています。

また、まちを上手く使っている講師をお呼びして、レクチャーと実践をセットで水辺やまちなかの使い方を学ぶ、パブリックシップスクールと言う演習も開催しています。

【パブリックシップスクール 20019 のチラシ（出典：水辺のまち再生プロジェクト）】

護岸整備や水面占用により広がる東横堀川の可能性。

● 末村さんは不動産業を本業とされており、水辺に特化した水辺不動産の事業も長年取り組まれていますが、不動産業から見て水辺の人気や価値はどう変化していますか。東横堀川では、今後護岸の改修工事を進め水辺との距離が近くなっていく予定です。β本町橋の周辺は護岸改修を終え、水面の占用可能範囲をマリーナ運営していく予定で、将来的にはβ本町橋の範囲外にも水面占用が広がる可能性があります。水面が使える水辺の不動産にニーズはあるでしょうか。

（末村）

水辺の不動産は人気が定着しましたね。まちなかの面白い古ビルがここ3年くらいで急激に減った事も影響しているのか、他と差別化できる希少なアイコンになっている気がします。

東横堀川沿川のお店からも、もっと水辺を感じられるよう、護岸を切ってほしいという声を聞きます。護岸が改修されていくのであれば、建物から水辺を感じやすくなり沿川の不動産もより気持ちのいい場所になると思います。水面も使える不動産というのも、とてもニーズがあると思います。水門で制御可能な東横堀川なら、20年くらい前に水辺のまち再生プロジェクトが言っていた提案したボートハウスが実現できるかもしれませんね。

● 水面占用となると、ルールや組織への加入など様々なしばりが出てくると思います。一般の方が個別に対応は難しいので、占用許可などの協議や運営のとりまとめを行う組織ができて、そこに対しての手数料を払って行く形になって行くかと思われますが、それでも使いたい人が出てくるでしょうか？

（末村）

しばりや金銭的な負担があるとしてもニーズはあると思います。自分もボートハウスができるなら使いたいですね。

●今後の沿川の護岸や公園の整備が進む際に、どんな工夫があれば魅力ある場所として使われるでしょうか。

（末村）

ストック活用の時代で、今あるものをどう使うかという発想が浸透してきているので現状での活用も進めつつ、再整備においては、構築物等の造作は極力控え、土手などで季節の花を沿川で育てるなどできれば楽しいと思います。きっちりと整備されると使い方の自由度が低くなってしまうし、本当に何かやりたいというエネルギーやクリエイティビティを持っている人はあつらえられた場だと面白くないと感じてしまうのではないでしょうか。土のまま置いておく事が、後々の色んな人の発想を活かせる余白になると思います。

● 確かに新しいアイデアや多様な使い方を受け入れるには余白が大切ですね。水辺空間の作り方としては、護岸を改修しても手すりが高く立ち上がると水辺の感じ方が違ってきますよね。北浜テラスでも手すりの高さを垂直に1.1m確保するのではなく、カウンター型に曲げてL字で1.1m確保するという提案をしていました。水辺空間の整備にも使い手目線の工夫が必要ですね。

（笹尾）

整備後の運営の面では、事故やトラブルを回避するために全て先手で手を打って予防保全的に回避しようとしますが、かえってコストがかかる場合もあると思います。夜間警備員をおかず監視カメラを設置し、何か起こったら見直し注意や対応をする方式で問題なく運営されている広場もあります。これからの管理やマネジメントには、起こってからでいいという考え方も取り入れた、リスクマネジメント的発想も必要ではないかと思います。

「賑わい」だけでない、水辺や公園の価値を計る新たなものさしが求められる。

● 今まで水都大阪・賑わいづくりと言うと水辺にお店ができると言うパターンできていますが、β本町橋ではそうじゃない形ができないかと考えています。東横堀川は立地や規模的にも、地域と密着して活動してきた経緯もあり、お店ができるだけでなく、もっと個人個人が主体的に関わるような仕組みが合っているのではと思っていますが、東横堀川における「賑わい」のあり方についてどう思いますか。

（笹尾氏）

ある公園では、行政と協定を結んでいた中間支援組織がバックヤード倉庫を占用し、公園管理者とルールを共有することで、自転車を使った移動販売を実現したことがあります。河川空間でキッチンカーが営業しているケースでは、賑わい施設の管理運営者が占用許可を取ってキッチンカーに専用使用の位置づけを付与しておられます。施設運営者が占用主体になって、実際に販売したり使う人が使いやすい仕組みで運用すれば、多様な主体を受け入れることも可能になると思います。

【公園での移動販売の様子（出典：foodscape cycle）】

（末村氏）

水都大阪として光をあて、行政が整備をすることで綺麗になり、あまり人が寄り付かなった大川・中之島も今では使いやすい場所になって多くの人で賑わっています。一方で、ワクワクしながら水辺の使い方を開拓していく面白みは減りました。大川・中之島・道頓堀といったメインとなる場所はそれで良いと思いますが、東横堀川までその様に均質化していく必要はないのではないでしょうか。都市には子どもが少し背伸びをしてドキドキしながら行ってみたいと思う様な場所があってほしいと思います。

自分が関わっているだけでも20年、水都大阪も色んなフェーズを経てきたと思いますが、それを表す言葉が「賑わい」だけで、もう少しフェーズに合わせて「あり方」を示す言葉も進化すべきだと思います。

● 今は行政として水都大阪のあり方を表す言葉が全て「賑わい事業」となっていますね。「賑わい」の評価も集客数と売上だけで評価されているために、本来の水辺やまちの魅力である自然発生的な活動や変化が評価されづらく、それらが受け入れられにくい状況になりかねない。今計れていない「賑わい」の新しい価値の評価指標が必要ですし、「賑わい」に変わる新しい「あり方」を表す言葉も必要ですね。

水辺空間やまちの魅力を活かした、20年後の世代にもつなげる場づくり。

● β本町橋として小商はもちろん、公園を使ったり、ボートホテル等の水面を使ったりするオリジナルのプロジェ

クトを自由に立てられる場所にして行きたいと思っており、新たなプロジェクトがやりたい事がある人が出てきた時に行政との協議や許可を施設運営側でフォローして、新たな面白いことが生まれる場所として行きたいと思っています。

（末村氏）

20 年くらい活動してきて、一番の課題は積極的に使う人がいないことだと感じ、パブリックシップスクールを始めました。水辺などの仕組みをつくってる人が水辺で遊んでない現状や、市民も自由使用と言ってもどんな風に使いたいかというアイデアや遊び方が分からないという人が多いです。

コロナ禍で近隣の若い飲食事業をやっているシェフのネットワークとつながり、日常使いの飲食店から高級レストランシェフも含めて、横のつながりを活かしたレストランデーを開催され好評でした。それを屋外の水辺に持ち出し、八軒家浜で水辺レストランを2回開催しました。今後も続く仕組みとするために、地域とのつながりをつくるべく、シェフたちは花壇の手入れ等でまちづくり活動にも参加しています。今後は屋外のレストランで安定して興業して星をとろうと、春からの運営を考えていこうとしています。店舗の人も何とか生き残りたいというのがあるから、これまでやってきたことや仕組みが生きています。こういった、何かやりたい人、自ら水辺を使う人をいかに見出すか、作っていくかが一番大事だと感じていますし、コロナ過に苦しむ飲食テナントとともにチャレンジできることは、不動産屋冥利に尽きます。そして次の 20 年後を見据えたら、今の子どもたちへアプローチも必要かもしれませんね。

【八軒家浜での水辺レストランの様子（出典：水辺のまち再生プロジェクト）】

● 今の子どもたちは、まちとの接点が限られている事が課題だと感じています。私たちの子ども時代の様な自由に行動する中で色んなことを獲得したり体験できたりする社会でなくなっています。β 本町橋を拠点としてまちとのつながりや水辺空間、公園を活かしながら、まちの多様性や水辺や公園の面白さを享受しながら育っていけるような、20 年後の世代につなげる場づくりができればと考えています。どうもありがとうございました。